

峯のぼりに上のぼて見れば草木森々そくもくしんしんたり。谷くだりに下くだりてたづぬれば大石連々たいせきれんれんたり。大狼おおかみの音山こえに充満おおかみし、猿ましらのなき谷こえにひびき、鹿かのつまをここうる音こえあはれしく、蝉せみのひびきかまびすし。春の花は夏なつにさき、秋あきの葉はは冬ふゆなる。たまたま見るものは山人やまかたが、たき木をひろうすがた、時々ときどきとぶらう人は昔むかしなれし同法どうぽう也。彼の商山しょうざんの四皓しこうが世よを脱のがし心こころち、竹林しちげんの七賢しちけんが跡あとを隠かくせし山やまかくやありけむ。峯のぼりに上のぼりてわかめや生おいたると見候みまうへば、さにてはなくしてわらびのみ竝なら立たたり。谷くだりに下くだりて、あまのりや、をいたると尋たずねば、あやまりてやみるらん、芹せりのみ茂しげり伏ふしたり。古郷ふるさとの事ことはるかに思おもわすれて候まうつるに、今此いまこゝのあまのりを見候みまうて、よしなき心こころおもひいでて、憂うれくつらし。片海かたうみ、市河いちかわ、小湊こみなとの磯いそのほとりにて昔見むかしみしあまのりなり。色形いろかたちあぢわひもかはらず。など我が父母ちちかみかはらせ給たまけんと、かたちがへ（方違うら）なる恨うらめしき、なみだをさへがたし。

（文永十二年二月十六日）